
クリスマスの奇跡

嶺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスの奇跡

【Nコード】

N1464Q

【作者名】

嶺羅

【あらすじ】

「クリスマスまでには帰るから」そう言ったまま、クリスマスに新一が帰ることはなかった。あれからもう1年。今夜は…クリスマス。CP新x蘭です。X・mas大分過ぎましたがお付き合いくださいー！

(前書き)

蘭sidedes

新一…あれからもう、1年が経ったよ。
あたしはずっと、新一を信じるべきかな…？

“クリスマスまでに”

新一はそう言っただけであたしの前から消えたよね。

確か…今まで抱えてた事件を解決しに…とか言ってたっけ。

あれからもう1年経った今、あたしは高校3年生の冬を迎え、
高校生最後のクリスマスを迎えた。

去年の今頃、新一は突然あたしの目の前に現れた。

帰ってきてくれたんだって…あたしは泣いた。

嬉しくて…ずっと待ってて、やっと姿を見れたから思わず道の真ん
中で新一の胸の中に飛び込んで泣いたんだ。

あの時新一は、どんなこと思ってたかな？

もうすぐXmas…新一ってこういうイベントはつとだから、多分
覚えてない。

いいんだ…去年もそうだったんだ。

次の日になって「そういえば」って。

わかってるけど、ちょっとくらい…期待しちゃってる。

せっかく帰ってきたし、何かプレゼントあげたいな。

「蘭わりい。俺また行かなきゃ…」

「え…」

もうすぐクリスマスだよ？

また…どこかへ行っちゃうの？

「クリスマスまでには帰るから」

「…え？」

「帰ってきたら、どうか一緒に出かけようぜ？」

「…うん。待ってるね。絶対帰ってきてよね？」

「おう。必ず帰ってくっからよ」

そう言って歩いていく新一の後ろ姿をしばらく眺めていたのを覚えている。

あの新一がクリスマスを覚えているなんて…ちょっと以外だったけど、嬉しかった。

新一、
新一。

あれからもう、1年。

コナン君もお母さんの所に帰っちゃって。相変わらずお父さんといお母さんは別居中で。2年前となんにも変わらない、この状態で、あたしはただひとつ変わったことにひどく後悔している。

…新一が傍にいない。

どうして「行かないで」って
言えなかったんだろう？

1年前のクリスマス、新一が来なかった
あの日、諦めるべきだった？

どうして「待ってる」って
言ったんだろう？

待ってられる自信、あの時は
あったのに、今はもうない。

どうして新一は約束してくれた？

涙が…止まらないんだよ。

普段降らない雪と共に、涙が地面に落ちていく。

…去年、新一と再会した、この道で。

「ふう…」

新一はもう来ない。

時計の針はもうすぐ12時をさす。

早いなあ…もうクリスマスなんだね。

25日かあ…あと2分で終わるけど…。

去年もこうして待ってたっけ。

事務所に降りて、事務所のソファに座ってずっと携帯とにらめっこして…

だけど新一は来なかった。

でもどうせ新一のことだから、長引いたんだろうと自分に言い聞かせてた。

絶対帰ってくるって、さみしくはないって。

だけど…流石に限界。

去年のこと考えてたら新一が恋しくなった。

やっぱり淋しい…。

街中では恋人たちが、家族が、この聖なる夜を共に過ごしている。

今日ばかりはお父さんもお母さんも二人で出ている、

園子も京極さんと今頃お家でパーティであろう。

和葉ちゃんも服部くんを連れてどこかに出かけているみたいだった。

…コナンくんも、今頃両親と一緒に楽しんでいるかな？
もう寝てるかな。

「…コナン…くん」

勝手なわがままだけど…コナンくんがいてくれたら、
あたしはこんなにも辛くなかったのかな。
なんて、コナンくんはやつとお父さんとお母さんのもとに
帰れたのに…あたしのエゴでいてくれる
訳なんてないのよね。

「…だけどね、あたし…淋しいよ…」

みんなみんな、今はきつと幸せ。
いつも人がいるこの道は今誰もいなくて。
1年前、新一と再会した時ざわついていたこの場所は
しんと静まり返っていて。

「あたし…なにしてるんだろ」
手のひらに落ちた雪は儂く消える。
それが淋しくて、空を見上げた。
…この儂い雪が消えないように。
目の前からなくならないように、この延々と降る雪の空を見上げた。

「…ツ新一い…」

涙が止まらなかった。

この降り続く雪のように。

「会いたい…」

ホワイトクリスマス。

恋人たちが幸せに溢れる聖なる夜。

時計の針は12時を指した。

クリスマス、終わっちゃった…

クリスマスが過ぎた今、あたしには虚しさと寒さだけが残った。

「…帰る」

くるっと向いている方向を変えて家の方向へと歩き出す。
目は涙のせいで腫れてる。

「…おせーよ」

ポア口横の階段前におっかかる人影。
その人影は、新一だった。

「…ど…して…」

「”クリスマスまでに”って、言っただろ。ったく…もう過ぎちまつたじゃねーか」

「だ…って…」

「まあ俺も、1年も待たせちまつただけどな」

「ったく…本当だよ…」

それにしても…来ないと思ってた。あれから1年経ってるし…。もし来てくれたなら、探しに来るか連絡してくれると思ってた。

「寒かったよね？連絡でもくれれば…」

「鳴らしても、でねえから」

「え？」

…そういえばあたし、部屋に携帯置きっぱだった！

「…ごめんね」

「いいよ別に。それより蘭、目晴れてねえ？」

「え…そ、そう？」

「…泣いたのか？」

「な、泣いてな…」

ああ…こらえらんないや。
何か切れたみたいに涙があふれ出す。
もうなんなの…

「泣くなよ…」

「ばかあ…」

「なんでだよ」

「うう…だいすき…」

「…おれも。ごめんな？遅くなって」

「…約束、ありがとう」

「おう」

新一にぎゅっとしがみついた。

新一も、あたしをぎゅっと抱きしめてくれた。

…たまには、こつゆつのもいいよね。

「ふふっ」

「なんだよ」

「…奇跡ってあるんだね？」

「なんだソレ」

「なんでもない！」

クリスマスは過ぎちゃったけど、サンタさんはあたしにプレゼントをくれたみたいだ。

ありがとう、サンタさん。

最高のXmasプレゼントだよ。

END

(後書き)

今日学校で思いついたので
書きました。笑

本当は花火 夏(蘭side)の
予定だったんですが:

どっからかわわっちゃってw

X'mas 冬(蘭side)に
なりました(- -、)

設定は、組織と決着をつけに行つて
それが1年延びちゃった〜って
感じですよ(笑)

相変わらず文章力ない(;|;|;
観覧ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1464q/>

クリスマスの奇跡

2011年1月15日20時56分発行